

コマおとしの教育



安藤 美紀 夫

私は、昭和二十九年に北海道へわたってから、十八年を北海道の東部で過ごした。

その間、時おり所用があつて、東京へ来たり、立ち寄りたりしたけれども、その時いつも感じたことは、どうして、まあ、東京の連中は、こうもせかせか歩かなければならないのか、ということであつた。こんなに大勢の人が一分一秒を争わなければならないような大きな仕事を抱えているのだろうか、不思議であつた。

それが、今、私自身が東京に移り住んでみると、いつのまにか、その足なみに、自分の足なみがあつていて、今さらのように愕然とすることがある。

しかし、考えてみれば、このセカセカは、どうやら、東京だけのものではないらしい。私が十八年を過ごした北海道にしてからが、このセカセカの波を逃れることはできなかったのだ。

私がいったころ、北海道の山は、とてつもなく大きかつた。

夏山、冬山の造材で山からきりだされ、木材会社に積みあげられる原木の太さに、驚嘆した。樹齢二百年、三百年という老木が、雪をかぶつたままきり倒される情景を思ひうかべたりした。ところが、それも、ほんの四、五年であつた。きりだされてくる原木の太さは、見る見るうちにやせ細つていった。家庭で使うストーブも、まきの値段がばかに高くなつて、今までのまきストーブから、石炭ストーブに買いかえなければならなくなつた。私がいたのは、北海道の東部といつても、森林の町で、炭坑の町ではなかつたのに、そのありさまであつた。

もちろん、植林はすすめられていた。伐採と植林が釣りあう永久林、などという言葉も聞いた。しかし、えぞ松やとど松がきられたあとに植えられた木は、たいていは落葉松であつた。落葉松の春は美しい。やわらかな緑の葉がつんつんつきたつた

風情は、たしかに、いい。だが、この木は二、三年で使いものになる木である。永久林とはいっても、二、三年周期のものにすぎない。

百年単位の周期から、十年単位の周期に、山が変わる。北海道の山が、年々小さくなっていく、という私の実感には、たいして狂いがなかったのだと、そう思うことが、むしろ悲しい。

最近、ある新聞のコラム欄に「高校の多様化」というのがあった。要するに、文部省が進めてきたこれまでの高校多様化に対する疑問をまとめたものである。

「なぜ、職業高校は受験生にそっぽを向かれたか、さらに理由をさぐると、生徒の適性・能力に応じての進路の分化は中学卒業時では早過ぎるという問題にぶつかる」。

「また、産業界は技術革新の進行が早い時代には、かえって、どんな職種についても応用がきく基礎的な学力を高校時代に身につけておいた方がいいと考えているのである」。

そんなことは、現場の教師たちには、初めからわかりきったことであった。たとえば、中学を卒業する女生徒のだけれが、秘書科にむくか、商業家庭科にむくか、などということは、だれにも判断できないことである。

また、すぐ役にたつ知識は、すぐ役にたたなくなることも、当然考えられていたことであった。

私は、こういう教育のやりかたを、「コマおとしの教育」と呼ぶことにしている。せかせかと動くコマおとしの映画を見るような、こういう教育がすっかりした実を結ぶとは、私にはどうしても思えない。

ひるがえって幼児教育を見る場合にも、せっかちな、このコマおとしの教育を、私たちは幼児に強制してはいないだろうか。幼児の読書について、これまで、私は、いろいろな会で大ぜいの母親たちと話をする機会を持った。私は、そのたびに、もし、ほんとうに子どもに本を読ませたければ、その前にまず、子どもたちを外へ追い出せ、といってきた。多くの人はげげんな顔をされた。私は、別に奇をてらって、そんなことをいうわけではない。

外での遊びを知らず、仲間たちとの遊びを知らず、いたずらを知らない子どもが、もし本だけに熱意を持つとしたら、それはほとんど異常であろう。かりに異常ではないとしても、そういう子にとって本とはいったい何なのか、考えさせられてしまうだろう。たとえば、「ピノッキオの冒険」にしても、外での遊びやいたずらをたっぷり経験した子どもの方が、そうでない子

どもよりも、はるかに豊かに冒険を実感できる。ほぼ疑いのないところ、と行っていいだろう。

しかし、大抵の場合、わが子の教育を熱心に考えれば考えるほど、目はそこから離れていきがちである。あぐけのはては、絵本に絵があるということも忘れて、字だけを追っかけまわしたり、ひどい場合には、絵本が読めるか読めないかで、わが子の知能を判定しようとしたりする。

小学校の国語教育でも、教科書のさし絵の貧しさは、見落とされてしまう。

そこには、「遊び」のコマを落とし、目を三角につりあげて、せかせかとつっ走る教育の姿がある。少なくとも、私にはそういう見えるのである。ルソーのあのおおらかなカリキュラムを、もう一度ゆつたりした目でとらえなおしてみることは、決して無駄ではないであろう。人間を忘れて、技術のみが非常な速度でつっ走る時代だからこそ、なおいっそう、そのことが必要に思われる。

ところで、上笙一郎は「日本のわらべ唄」という本の中で、わらべ唄喪失のもっとも直接的な原因として、〈子ども集団〉の崩壊をあげている。そして、子ども集団の復興を訴えている。

もちろん、ここでいわれているのは、遊びの集団であることはいうまでもない。この、子どもたちの遊びの集団をこわしていったものは何なのか。

私は、十年ばかり前、「たなばた」と題する随筆を、俳句雑誌に書いたことがある。その中で、私はこう書いている。

このあたりには、竹がないので、子どもたちは川辺から手ごろの枝を切ってきて、それに短冊や提灯をつるして遊ぶ。今年は、小中学校の肝煎りで、あちこちに子どもたちのための花火の会があったが、それは今年初めての試みであった。

たなばたの夜、子どもたちは集まって、手に手に小さな提灯を持ち、

「ローソク出せ、出せよう、出さねえと、カッチャくぞ。」と、拍子をとりながら、戸毎をまわって歩く。カッチャくというのは、「ひっかく」という言葉の意味である。

ひっかかれてはたまらないので、ぼくも、その夜は小さなローソクを用意して待つことにしている。

ところが、去年は、うっかりして、ローソクの用意を忘れてしまった。遠くから聞こえる子どもたちの声を聞いて、やっとそのことを思いだったが、もうおそかった。

門口に集まって、大勢で呼んでいる子どもたちの声を聞きながら、ぼくは、じっと息をこらして、子どもたちが立ち去るのを待っていた。何か罪をおかしたような気持ちであった。

最近、子どもたちの父兄の中からそうしたユスリのようなまねはよくないという批判が出て、それは、だんだんなくなっていく運命にあるらしい。花火の会も、それをやめさせるための、ひとつの方法であつたらしい。

ぼくなどは、花火大会などより、「ローソク出せ」の方がよほど面白く、そのようなユスリなら、喜んで受け入れるつもりであつたが、それが教育というものなら、どうにもいたしかたないのである。

そこにあつたのは、まぎれもなく遊びの集団であり、子どもの自然性に支えられたタテの集団である。私は、それを「ガキ集団」と呼ぶことにしている。

幼児教育の場合にも、横の集団の保育については、いろいろとすぐれた提案や実践報告を目にすることができなければならない。タテの集団については、あまりお目にかからない。私の不勉強もあるだろうが、そのへんの手うすさは、どうも否定できないように思われる。そして、現実には、あたりを見まわしてみても、

ガキ集団の存在はほとんど認められなくなってしまっている。

遊びの継承と遊びの創造を中心にした、ほんとうの意味での幼児の学校は、このガキ集団にあるのではないかと、私などは考えるのだが。

ともあれ、北海道の山を小さくしたのと同じ発想による、せっかちなコマおとしの教育、それによって失なわれたものは、あまりにも大きすぎる。ことに、幼児教育は、もつとゆつたり、おおらかに、と望むのは、もはや手おくれなのだろうか。

安藤美紀夫氏は皆さまよくご存じの、「白いリス」の作者です。

私はある日偶然に、ラジオでこの「白いリス」の朗読と、作者の言葉を聞いて深い感銘を受けました。そしてこんな方に「幼児の教育」に何か書いていただきたいと、切に思いました。今回、念願がかなってご執筆いただきました。

(赤間)